【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

| 都道府県名 | 高　知　県 |
|---|---|

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

| 学校名 | 土佐山田町立　鏡野中学校 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学　年 | １　年 | ２　年 | ３　年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | ４ | ４ | ５ | ４ | １７ | |
| 生徒数 | １２５ | １５０ | １７６ | ９ | ４６０ | ３７ |

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

人権感覚豊かな学習集団づくりと生きる力を育む授業を創造する

――― 共にあゆむ進路保障 ―――

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

・数学（全学年）

基礎・基本の定着に大きな差があり、生徒の実態に適した指導が必要であるため。

・英語（１・３年）

理解状態に差がでやすい教科であると共に、特に、１年生では新しい学習の仕方を身につけさせるため。

（２）年次ごとの計画

| | |
|---|---|
| 平成１５年度 | ○テーマ<br>自ら学ぶ意欲を育てる。<br>○研究の見通し<br>正確な生徒の実態把握に努め、全職員が教育活動のあらゆる場面で意識して取り組み課題を解決する。<br>○研究の内容・方法<br>（生徒の実態把握）<br>標準学力検査（ＣＲＴ）の検査を分析し、生徒の学力状況を把握する。<br>（一人ひとりを大切にした授業研究）<br>習熟度に応じた指導法の研究実践に努める。 |

| | |
|---|---|
| 平成１６年度 | ○テーマ<br>　自ら学ぶ意欲を育てる。<br>○研究の見通し<br>　残された課題解決へ向け、家庭と連携して取り組みを進める。<br>○研究の内容・方法<br>　（生徒の実態把握）<br>　生活実態調査を分析し、学力についての生活課題を把握する。<br>　（個に応じた指導の研究）<br>　生徒の実態に最も適した指導（少人数・習熟度別・ＴＴ・補充）の実践に努める。 |

（３）研究推進体制

フロンティアスクール研究推進組織

研究推進委員会 ―― 研究部会 ―― 授業づくり部会
研究部会 ―― 学習集団づくり部会
研究部会 ―― 授業改善部会

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

標準学力検査を分析し、それぞれの課題に向けた取り組みが各教科でできた。

例えば、漢字を書くことに対しては、漢字帳による追い込みとか、思考力に対しては、生徒の意見交換が生まれる発問や切り返しのある授業を展開することができた。また、少人数指導では、生徒自ら動かざるを得ないので今までコミュニケーション・発表等を苦手としていた生徒も、多くの者が動き、発言し、それが自信となり学力向上へとつながった。

ＴＴ指導においても、きめ細かな指導が行え、生徒も質問しやすく「わからない」が言えやすい状況であり、理解が進んだ。

標準学力検査（国語・数学・英語）から３年生では、国語と英語で県内の得点率を超えることができた。

国語　県内７０．６　本校７０．９　　数学　県内４９．２　本校４５．１

英語　県内５７．２　本校５９．９

２．今後の課題

| |
|---|
| 学習規律の定着が課題である。中でも、家庭学習の定着である。この課題を解決するために、自学自習ができるように課題提示の方法を研究する。また、家庭との連携の在り方についても見直す。 |

Ⅳ　学力把握のための学校としての取り組み

| |
|---|
| 標準学力検査で検証する。（５月に実施予定）<br>生活実態調査を実施する。（４月に実施予定）<br>生活実態調査から家庭学習等を把握する。 |

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

| |
|---|
| 県教育委員会主催の地区別研究会で発表。<br>県学力向上推進協議会で発表。<br>町内学力向上推進部会で発表。 |

◇次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　☑１６学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
□その他

【研究教科】　□国語　□社会　☑数学　□理科
☑外国語　□音楽　□美術　□技術・家庭
□保健体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□ 無